

浄土宗開宗八百五十年慶讃法灯りレー法要表白

うやうや

おもん

恭しく惟みるに、宗祖しゅうそ（元祖がんそ）圓光えんこう和順わじゆん法爾ほうに大師だいし法

ねんしょうにん

せいし すいじやく

みまさかのくにうるまけ

ごうたん

たま

然上人は、勢至の垂迹として美作国漆間家に降誕し給

さと

もと

ふくん

ゆいくんわす

おんとしじゅうご

い、悟りを求めよとの父君の遺訓忘れがたく、御年十五に

えいざん のぼ

しゅつけじゆかい

しゅうがく

はげ

たま

して叡山に登り、出家受戒して修学に励み給えり。

がくしき

けんみつ

わた

ち えだいいち

ほま

さんとう

たか

その学識は顕密に亘り、智慧第一の誉れは三塔に高く、

すえ

てんだい

とうりよう

のぞ

みょうり

いと

さいとうくろだに

末は天台の棟梁にと望まれしも、名利を厭い西塔黒谷に

いんとん

ぼんぶおうじよう

みち

もと

たま

隠遁して、ひたすら凡夫往生の道を求め給う。

さら

なんと

ゆうがく

せきがく

おし

こ

もと

みち

更には南都に遊学して碩学の教えを請うも、求むる道を

う

かな

ふたた

くろだに

かえ

なげ

なげ

きようぞう

得ることは叶わず、再び黒谷に歸りて、嘆き嘆き経蔵に

い

かな

かな

しょうぎよう

む

たま

入り、悲しみ悲しみ聖教に向かい給えり。

いっさいきよう

ひえつ

ごへん

ぜんどうだいし

かくして一切経を披閱すること五遍、とりわけ善導大師

おんしょ

ひもと

さんべん

つい

じょうあんごねんはる

かんぎようのしよいつしん

の御書を繙くこと三遍、遂に承安五年春、観経疏一心

せんねん

もん

よ

せんじゆねんぶつ

き

じょうど

しゅう

あ

専念の文に由り、専修念佛に歸して浄土の宗を明かし、

ぼんにゅうほうど

みち

ひら

たま

凡入報土の道を開き給えり。

じらい

しょうみょうねんぶつ

こえ

しほう

み

だいしゅうひと

こうみよう

爾来、称名念佛の声は四方に満ち、大衆齊しく光明

摂取せつしゅの法益ほうやくを受うくることを得えたり。

今いま、開宗かいしゅう八百五十年の佳辰かしんを迎むかうるに当あたり、宗祖しゅうそ

がんそ ほうねんしやうにんかいしゅう

みこころ

おも

は

くろだにせいりゅうじ

（元祖）法然上人開宗の御心に思いを馳はせ、黒谷青龍寺よ

ほうとう

いただ

そざん

ち

おんいん

みえいどう

ささ

よ

でし

り法灯を戴いたき、祖山知恩院の御影堂に捧ささぐ。仍よつて弟子

どう

そおん

むく

ため

こころあら

ほうとう

う

つ

〇〇等、祖恩に酬むくいんが為ため、心新たにこの法灯を受け継

きやうく

じ

だいしぜん

けん

かいしゅうほうおん

ぎ、〇〇教区（〇〇寺）の大師前に献けんじて、開宗報恩の

ほうよう

しゅう

あわ

だんしんと

けちえんきやうみやう

すす

ねんぶつ

法要を修しゅうし、併あわせて檀信徒に結縁交名を勸すすめ、念佛

こうる

し

ねが

たてまつ

響流に資しせんことを希ねがい奉たてまつる。

あお

ねが

だいし

じこうますますかがや

ゆいほう

とくふういよいよあまね

仰あおぎ願ねがわくは大師の慈光益々輝ゆいほうき、遺法ゆいほうの徳風とくふう弥々いよいよ徧

ねんぶつ

いちきやうじつぽう

ひろ

みだ

せつけまつだい

およ

く、念佛の一行十方に弘ひろまり、弥陀みだの摂化せつけまつだい末代に及およばん

ことを。

これとき

維時 令和 年 月 日

遺弟ゆいてい

〇譽〇〇

敬うやまつて

白もうす

※この表白は宗令「開宗八百五十年慶讃法要表白」を基にした文例です。趣旨に合わせて
適宜変更の上ご使用ください。

※このまま読まれる場合は当該教区・寺院等で取捨選択してご使用ください。